

薬局薬剤師の介入による小児吸入治療のアドヒアランス向上を目指した取り組み

石黒 奈緒¹

¹総合メディカル株式会社 そうごう薬局 流山おおたかの森店

【目的】吸入ステロイド薬(以下 ICS)は、喘息の長期管理薬のひとつであり、小児においても使用が増加している薬剤である。しかしながら、患児本人が手技や治療の必要性を理解しづらいことから、吸入操作の不備や治療を受け入れないなどの問題が生じやすい。そこで、患児と保護者に対して薬局薬剤師が介入することにより、小児の吸入治療におけるアドヒアランス向上を目指す。

【方法】2015年11月から12月に来局した吸入治療を継続している患児（平均年齢3.6才、平均治療期間183日）と保護者に対して、服薬指導時に治療への認識・意欲についてアンケート調査を実施。その内容に基づき、吸入手技の確認と実演による手技の再指導、治療や薬剤に関する認識の確認や患児と保護者の関わり方のアドバイスをを行った。さらに、6か月後に2回目のアンケート調査を行い、2度のアンケートで回答が得られた対象者に追加の3回目のアンケート調査を15か月後に実施した。

【結果】アンケートの回答に協力が得られた対象者は、初回及び6ヶ月後は23名、15ヶ月後はそのうち19名だった。手技については、初回に9名15件の不備が見られたが、最終時は1名1件だった。初回には吸入を嫌がる患児が5名みられたが、中止した1名を除く4名は6ヶ月後の時点で改善が見られていた。また、最終時のアンケートで薬剤師の指導内容に対して有益だったと回答したのは、19名中、「吸入薬の手技やお手入れの方法」18名、「治療や薬剤への保護者の不安・疑問の解消」7名、「患児との関わり方のアドバイス」14名であった。治療効果面では、最後まで処方内容を追跡できた17名中10名において、治療薬であるICSやロイコトリエン受容体拮抗薬の用法・用量の減量あるいは中止が見られた。

【考察】薬剤師の指導により、正しい手技の獲得、患児と保護者の治療に対する認識・意欲が改善した事が示唆された。また、処方薬の減量が見られたことから治療効果へも寄与できたと考えられる。このように、小児の吸入治療においては、実演を含めた吸入指導、治療や薬剤に関する認識・意欲への働きかけ、親子の関わり方について、患児と保護者に対して薬剤師が介入を行うことは治療のアドヒアランス向上のために重要である。

【キーワード】小児、アドヒアランス、気管支喘息、吸入薬、服薬指導